



讃岐田訓先生の水のお話し

「関西の水を知る 水に学ぶ」

もと神戸大学教授讃岐田訓先生の「関西の水を知る 水に学ぶ」という文章があります。関西よつ葉連絡会のひこばえ通信に2003年掲載されたもので、ユーモアたっぷりにわかりやすく水道のお話がかかれています。

先日、突然のメールで失礼とは思いましたがシミ・ジャー通信「さわやか」に掲載をお願いしたところ快く承諾をいただきました。

先生は長年、水環境の調査や研究に携わり、講演活動やその著書で環境汚染の現状に警鐘をならしています。

今号から2回分づつ5回にわたり先生の文章を掲載させていただきます。ぜひ参考にしてください

讃岐田 訓先生プロフィール

市民、研究者らで組織する「瀬戸内海汚染総合調査団(1971)」や「琵琶湖淀川汚染総合調査団(1984)」に参加し、赤潮による養殖魚の大量斃死や水道水による発ガンのメカニズムを解明。
20年目の「琵琶湖調査団(2004)」副団長。

2004年3月末に神戸大学発達科学部教授を定年退官後、神戸水環境研究所を開く。

著書「遺伝子を撃つ水道水」北斗出版

「日本の水環境 近畿編」

日本水環境学会編、技法堂出版

讃岐田 訓(神戸水環境研究所)

第1回 水道水をそのまま飲んでいますが、敬遠されてきた大都市部の水道水

みなさんこんにちは。ところで、大阪や神戸、あるいは阪神間に住んでおられる方に、特におうかがいしますが、あなたは普段、水道水をそのまま飲んでいますか。普段は飲んでなくても、最近、水道水をそのまま飲んでみたことが、一度でもありますか。

読売新聞社が昨年の夏に行なった全国世論調査によりますと、ふだん、自宅で飲んでいる水について、水道水をそのまま飲んでいる人は、町村部で58%ですが、大都市部では33%にとどまっています。

それでは、大都市部の人はどんな飲み方が多いかを見ますと、浄水器などを通した水が47%、ミネラルウォーターが39%、水道水の湯冷ましが21%です(複数回答)。なお、この傾向は若年層になるほど強いそうです。

大都市部で水道水が敬遠される理由の最たるものは、味のまずさと、不快な臭いです。また、貯水槽や水道管の汚れ、消毒剤による発ガンの可能性なども理由になっています。関東や近畿では、水源となる河川や湖沼の汚染が水道水に悪いイメージを与えています。

知っていましたか、浄水方法の大転換

冒頭で阪神地域に限定したのは、実は理由があるんです。もちろん、この地域には、淀川の水からつくった、まずくて臭く、発ガンの危険性がきわめて高い水道水が供給されてきました。

しかし、だまされたと思って、水道水をそのまま飲んでみてください。

驚いてはいけません。以前のようにはまずくはない。不快な臭いもないんです。塩素消毒による発ガン性も3分の1位に低下しています。知っていましたか。いままでの水道水に対する先入観から離れられないのではありませんか。

種明かしをしますと、浄水方法が大転換されたからです。ほぼ10年がかりで、巨費を投じて施設をつくりかえました。塩素処理浄水法からオゾン・活性炭浄水処理法(高度浄水処理法)に、2年、4年前にすでに切り替わっています(表1)。

と、ここまで書くと、「おまえ、ひよっとしたら、水道屋のまわしもんとかやうか?」といわれそうなので、ひとこと言うときますと、17年ほど前から、琵琶湖・淀川の水道問題で、市民・研究者グループとして行政と渡り合ってきました。その中で得たひとつの成果だと思っています。

これまで、何十年も飲まされてきた「まずくて臭い、危険な水」は、どこに原因があったのか。今回はこのあたりをお話することになります。

(表1) 高度浄水処理施設の建設概要

事業体	供給量(日)	総建設費	全面供給時期
大阪府水道	270万トン	880億円	1998年7月
大阪市水道	240万トン	750億円	2000年3月
阪神水道 企業団*	130万トン	470億円	2001年4月

* 神戸市、芦屋市、西宮市、尼崎市の共同事業体